

(二〇一五年度)

## 5 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は18ページ、三問である。)

### 受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいねいに消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次の文章は中村雄二郎「プリコラージュ——蒐めるといふこと」の一部分である。A、B両方を読んで、後の問に答えよ。

A

それにしても、ひとはなぜ物を集(あつ)めるのだろうか。明らかに実用をこえているいろいろな物を集めるのだろうか。旅の記念品という面もあるけれど、蒐集(しゅうしゅう)にはそれ以上に一種の情熱が働いている。まさにその情熱を問題にしているのはボードリヤール(『物の体系』)である。彼はこんなことを言っている。『リトレ仏語辞典』では(物)とは「情熱の原因・主題になつていくすべて、比喩(ひゆ)的な意味でとくに(好きな物)を表わす」というかたちで定義づけられている。その点で、日常生活のなかで出会う物にしても、それはひとが個人として所有したいという情熱(情念)の対象である。

ところで、もともと物には、用(もち)いられることと所有(しゆ)されることという二つの機能があつた。前者は実用的な機能である。それに対して後者は非実用的な機能であつて、物はこうして実用から分離(ぶんり)されるとき純粋(じゆんすい)な物になるのである。またこの純粋な物は、一たび蒐集という情熱の対象になると、おのずとシリーズ化してくる。つまりひとは、物を一つだけ所有するのでは満足(まんじつ)できず、同種のシリーズの全体を所有したくなるというわけだ。

その点で、「蒐集とは一種の愛の遊び」<sup>1</sup>働(はたら)きである(モーリス・レーム)というの<sup>2</sup>は正しい。子供にとつては蒐集は外的な世界を支配するもつとも基本的な方法である。それは呪術的なやり方であるけれど、そこにはまぎれもなく世界に対する整理・分類・操作といった働きが含まれている。また蒐集家たちは自分たちの振舞いをきわめて高級な行為だと考えている。それは彼らが集めている物そのものの性質によつてではなくて、むしろ蒐集という情熱に彼らが誇(たか)りをもっているからである。

さらに、蒐集というわれわれの行為には奇妙(くせう)なパラドックスが含まれている。それは蒐集の独自性をめぐつてである。コレクションの場合、独自性を問題にするならば、その独自性は客観的には決して証明されえないことがある反面、主観的にはなにもそれを立証する必要がないからである。その上、物の絶対的な個別性<sup>3</sup>≡特異性は(私)に所有されることに由来するが、(私)が自己の個別性<sup>3</sup>≡特異性を認識するのは、どのようなものを所有しているかによるといふことがある。もつとも、こ

これらのことは悪循環ではなくて、むしろ自己回帰として捉えられるべきである。つまり、人間はいつでも、ほかならぬ自分自身を蒐集しているにほかならないのである。<sup>5</sup>

このように、集められた物、蒐集された物は、実用の対象としての物ではなくて、いわば情熱としての物であり、象徴あるいは記号としての物であった。つまるところ、ひとは蒐集によって自分の世界、呪術的・神話的で象徴的な自己の世界をうち立てるのである。さらにいえば、蒐集によってひとは、世界を所有しようとしているのであり、世界と一体化しようとしているのである。蒐集が一方でおのずと物の一つのシリーズ、一つの総体・集合をめざすとともに、他方でたえず<sup>6</sup>欠如への不安に脅かされるのも、そのためであらう。

いま私たちは、ポードリヤールにふれて情熱としての蒐集について見てきた。けれども、ものを集めること・蒐集は、もちろんそのようなかたちでだけ問題になるのではない。私たちがそれぞれによく生きるために必要な知識、学問や文化の創造に役立ちうるような知識を集め、わがものにすることもまた蒐集である。

ところで知識といえば、在来多くの場合、精緻で普遍的な科学的知識、物理学をモデルにした科学的知識が理想とされた。だが、科学の専門分化とともに科学的知識がいつそう精密化、細分化されるようになると、その知識は知識としてどんなに普遍性を持ち、厳密であっても、私たち個々人の日常生活や生きられた経験からは遠いもの、無関係なものになってしまった。それにともなつて、人間経験のうちに内在する知恵をもつと生かすような知のあり方が、日常生活のレベルでも、学問のレベルでも等しく顧みられるようになった。

すなわち、近代科学は技術文明と結びついて、多くの精密機械やそれを使う機械作業を生み出したとはいえ、私たち人間の生活世界、生きられた経験のなかで重要なのはむしろ、身近にある使い慣れた道具や材料を自在に組み合わせ行なう創造的行為であり、その重要性が忘れられてきた。そのような行為のあり方、知のあり方が、(プリコラージュ)と呼ばれるものである。あり合わせの道具や材料を十分生かして自分の手でものをつくること、つまり手仕事・器用仕事を意味するこの(プリコラージュ)は、(野生の思考)にひそむ知恵としてレヴィ・ストロース(『野生の思考』)によってうち出されたものだが、やがて

〔日曜大工〕や〔ドゥ・イット・ユアセルフ〕の意味でも使われるようになった。つまりそれは、<sup>7</sup>身体性の回復としての手づくり、再認識の時代にふさわしい技術のあり方、知のあり方なのである。

B

ところで、蒐集やプリコラーージュと根柢で結びついているもう一つの現代的な問題がある。それは<sup>8</sup>引用の問題である。引用の理論とは、一口でいえば、すべてのテキスト(作品、文章)を、(引用のモザイク)(クリステーヴァ)あるいは同じことだが(引用の織物)(宮川淳)として、引用という見地から徹底的に考えることである。そしてこの場合(引用)とは、ただ単にいわゆる引用文、はつきりそれと示された引用文だけでなく、意識的であると無意識的であるとを問わず、作者がそこで前提としているもの、作者の着想の源となっているものについてもいわれる。また、テキストといった場合、それはいわゆる言語によって書かれた文章だけではなく、もつと広く、絵画、音楽、建築などの芸術一般の作品を含む、創造的行為一般の作品をさしているのである。

かつては作者の<sup>9</sup>独創性、他に少しも依存しない独創性こそが創造の根源であり原動力であると考えられていた。それに対して引用の理論の目ざしているのは、ほかのテキスト(プレ・テキスト)からの直接、間接の引用、既存の諸要素(先立つほかのテキストの諸部分)の組みかえのうちに、作品形成の仕組みと秘密を見出すことである。とすれば、引用の理論は創造活動の否定、否認にはならないであろうか。そんなことはない。たしかに(引用)の観点が導入されることによって、かつてのような素朴で牧歌的な(独創性)の観念は崩れ去るであろう。けれども実際には、引用においても既存の諸要素の自由な組みかえという点で、創造活動はまぎれもなく働いている。むしろ引用の理論は、創造活動が決して真空の中で無前提に行なわれるのではないこと、創造活動の実際の在り様は既存の諸要素を大きく媒介にしていることを、かえってよく示しているのである。

ことばを換えていえば、引用の理論は、創造活動というものが、遠くから多くの材料を集めてくること、またその集めてきたものを新しい関係のうちに捉えなおすことによって成り立っていることを示している。こういうわけで<sup>10</sup>(引用)は(蒐集)や

〈ブリコラージュ〉、とくに後者とよく似た仕組みをもっている。すなわち、そのいずれの場合も、集められたものを自家薬籠じかやくろう中のものにしながらか、新しい関係のうちに自在に組みかえるわけである。

問一 傍線部1「実用から分離されるとき純粋な物になる」のはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 物の機能が発揮されるのは、用いられることよりも所有されることを通してであるから。
- b 物は蒐集されることによって一種の情熱がそこに加わるようになり、その機能に変化が生まれるから。
- c 物とは、使用されることによって存するのではなく、ひとの願望の対象として存在すると言えるから。
- d 物は使われることによつてではなく、好かれることによつて真に所有されることになるから。

問二 傍線部2「子供にとつては蒐集は外的な世界を支配するもつとも基本的な方法である」を筆者の考えに沿つて説明した文として次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 子供にとつて集めるとは愛することであり遊びであるが、愛することによって自分を取り巻く未知の現象を把握する術をえる。
- b 子供は好きな物を集め、分けたりまとめたりする遊びをすることで、混沌こんとんとした環境を自身のものとして認識する。
- c 子供が集める行為は、自己と外部を分けながら自分の周りをまじないによつて自分と同化させる行為である。
- d 子供が集めたものは、雑多なものでありながらそこには一つの秩序があり、そこに不思議な力をもたせて安心をえる。

問三 傍線部3「奇妙なパラドックス」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 集めることは第三者にはまったく個別的行為であるが、本人にとっては独自性を明らかにする必要もないということ。

b 自分の個性性は集める物の独自性によって示されるが、物が絶対的に所有されることがその理由になっているということ。

c 物が集められることによって生じる独自性は客観的ではあり得ないが、主観的に見れば所有の根拠となっていること。

d 物自体の独自性は人にもたれることによって決まるが、所有者の個性性を規定するのはもっている物であるということ。

問四 傍線部4「人間はいつでも、ほかならぬ自分自身を蒐集しているにはかならない」のはなぜか。次の中からもっとも適切な

なものを一つ選べ。

a コレクションをする人間は物が集めたいのではなく、物の性質により自分自身に戻ってくることを求めているから。

b 物自体が示しているのは、集めたいという気持ちであり、その総体が自分自身であるから。

c 集められた物は人間の情熱そのものを示しており、その振舞は自分自身のプライドの表現であるから。

d 外的世界を形成する物を集めることは、堂々めぐりではなく、自由な自分自身を作ることになるから。

問五 傍線部5「象徴あるいは記号としての物であった」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 燃え立つ気持ちこそそれ自体としてあらわすためには必要不可欠な物であった。
- b それ自身の働き、機能とは関係のない別のことを意味する物であった。
- c 抽象的な思想を示しながら約束事をそのまま指す物であった。
- d その実態は明らかでないが絶対と信じ込まれている物であった。

問六 傍線部6「欠如への不安に脅かされる」状態とはどのような状態か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 総体に何か欠けると感じるとは、自分の不充足性を意味し、自分が世界との関係性を喪失してしまうのではないかと恐れる状態。
- b シリーズが欠損していると感じるとは、自分が得た世界の誤謬性ごびょうを意味し、うち立てた自己は所詮夢物語に過ぎないと疑い、恐れる状態。
- c 蒐集に欠落があると感じるとは、自分の魔術的な能力が未熟なことを意味し、自分が一つになろうとしていた世界が自分から乖離かひりすることを恐れる状態。
- d 集合が不足していると感じるとは、自分と他との相違が決定的ではないことを意味し、物が自分自身を作っているという確信が揺らぎ、恐れる状態。

問七 傍線部7「身体性の回復としての手づくり、再認識の時代にふさわしい技術のあり方、知のあり方なのである」と筆者が考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

a 科学的知識、技術が理想とした普遍性が過度になった反省として、普段の生活が注目されるようになり、人間自身の中に潜在する能力、生産性がかえりみられるようになったから。

b 科学的知識、技術が特化されていた結果、生活と無関係になってしまったことを超越するには、野生の力による先天的知恵で考え、作ることが重要であると再認識されたから。

c 科学的知識、技術に誤りがなく細部にわたるようになったことを認識し、それらをさらに発展させるために必要なのは、素朴な考え、素材を使うことだとわかったから。

d 科学的知識、技術がますます綿密、複雑になった反動として、これまで使用していたものを創造的に生かす知恵が見直されてきたから。

問八 傍線部8「(引用)の問題である」の(引用)を筆者はどのように考えていると思われるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 明瞭に示されているわけではないが一作品に織り込まれた、概観的芸術作品全体。

b 何かを生み出す際に当然の条件となり、思いつきの元となる、作品の集合体。

c 創造されたものにアイデアとして寄せ木のように組み込まれ、止揚されている包括的作品群。

d 作品が生まれる際に、意図的に邂逅かいこうし総合的に判断、選択された広義におけるテキスト総体。



問九 傍線部9について、「(独創性)の観念は崩れ去る」と同様のことを示しているものを、次の中から一つ選べ。

a 『新古今集』時代にもっともさかんだった本歌取りは、人口に膾炙した歌をふまえ連想により詩的内容をより豊かにする創作技法であった。

b 現代美術は、抽象表現主義、ポップ・アートなど伝統的な様式にとられない斬新で奔放な手法の美術であるが、一九六〇年代以降はさらに多様になっていった。

c 第二次世界大戦以後に生まれたいわゆる「前衛の音楽」は、電子音楽、偶然性の音楽、コンピューター音楽なども含め、複雑な様相を呈している。

d 二葉亭四迷は日本最初の近代リアリズム小説『浮雲』を発表し、同第二編、第三編と書き進んで、近代口語文体を完成させたが、間もなく文学に疑問を感じ、『浮雲』を中絶した。

問十 傍線部10(引用)は(蒐集)や(ブリコラージュ)、とくに後者とよく似た仕組みをもっているのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを選び、理由を述べよ。

a とくにブリコラージュは、雑多な諸要素から適切なものを選び、思うままに取り合わせ、ひとつの構築物にする行為であるから。

b とくにブリコラージュは、意識的または無意識的に、今あるものを媒体として、今までにない身近なものを創造する行為であるから。

c とくにブリコラージュは、経験によってえた関係性に乏しい周辺の器具と素材をとおして手作りにふさわしい独創性を生み出す行為であるから。

d とくにブリコラージュは、直接的、間接的を問わず、常識的には独創的とはいえない方法で新しいかわりをつくり上げる行為であるから。

二

次の文章は、市川匡麻呂(一七四〇—一七九五)の本居宣長への批判と、それに対する本居宣長の反論の部分である。これを読んで後の問に答えよ。

すべて言伝と云ものは、人に命の極あり、事に伝への謬あり、多くは消ぬるがちに於て、実ならぬ事のみ遺存ぞ、常の例なる。文字ある国は、文字にて事を記しつれば、上つ代をも今の如く知らずる事灼然、是を文字の徳と云めり。御国は、応神天皇の御世に、異国より渡り来て、始めて文字を用ひ習へり。応神より天武まで三百年ばかり、かの阿礼が誦習たる御記録どもは、此三百年の間に作りたるものなるべし。応神より上つ方神武天皇まで千年ばかり、神武より上つ方は、又幾年や経たりけん。凡て文字なき間は、其事はた言伝のみにして、消ぬる例の中なれば、上つ方の古事は、後の天皇の御慮に令成つる秘事なりけり。御国の史読まん人、よく此旨を意得てよ。

(市川匡麻呂『末賀乃比礼』)

言を以ていひ伝ふると、文字をもて書き伝ふるとをくらべいはんには、互に得失有りて、いづれを勝れりとも定めがたき中に、古へより文字を用ひなれたる今の世の心をもて見る時は、言伝へのみならんには、万の事おぼつかなるべければ、文字の方はるかにまさるべしと、誰も思ふべけれども、上古言伝へのみなりし代の心に立ちかへりて見れば、其世には、文字なしとて事たらざることなし。これは文字のみならず、万の器も何も、古へには無かりし物の、世世を経るままに、新たに出来つつ、次第に事の便よきやうになりゆくめる、その新しく出来始めたる物も、年を経て用ひなれての心には、此物なかりけん昔は、さこそ不便なりつらめと思へども、無かりし昔も、さらに事は缺ざりし也。

文字のうへにても、皇国には漢字あり、片仮字あり、平仮字有りて、此三つの内一つもかけては、事によりて不便なるを、漢国には、片仮字も平仮字もなければ、さらには是なくて不便也とは思はず。又遠き所へ大切の用事をいひやるに、口状にては違ある故に、書状にていひやる、是は文字の徳也。然れども又、書状にては分りがたき事も有りて、品によりては使をさ

して、委くはき事は口状にいひやりて、よく分るる事もあり。これは又言伝への徳ならずや。されば書は言を尽5さずと漢人もいへりき。

6 これをもて見れば、上古の事も、後まで言伝へのままならば、返りて精くはき意味も伝はるべきが、中々に文字伝へになりて失ひぬることもあるまじきにあらず。猶此得失をいはば、たがひにくさぐさ有るべきを、今難者、言伝への方には失をのみ挙げて、得をいはず、文字伝への方には、得をのみ挙げて、失をいはずは、偏8ならずや。言伝へは実ならぬ事のみ遺るといへれども、此失は文字伝へにても同じ事也。文字にても、虚を書き伝ふれば実はこのらず、言にても、実をいひつたへば、などか実の遺らざらん。

又言に伝への誤りありといへるは、誠にさることにて、文字は不朽の物なれば、一たび記し置きつる事は、いく千年を経て、そのままに遺るは文字の徳也。然れども文字なき世は、文字無き世の心なる故に、言伝へにても、文字ある世の言伝へとは大いに異にして、うきたることさらになし。今の世とても、文字知れる人は、万の事を文字に預くる故に、空にはえ覚え居らぬ事をも、文字しらぬ人は、返りてよく覚え居るにてさとるべし。殊に皇国は、言靈の助くる国、言靈の幸ゆきはふ国と古語9にもいひて、実に言語の妙なること、万国にすぐれたるをや。

(本居宣長「くずばな」)

問一 傍線部「人に命の極あり」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なもの一つ選べ。

- a 人生がきわめて短いように
- b 寿命が必ず尽きるように
- c 命令がまちがって伝わるように
- d 人には命があるように

問二 傍線部2はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a とかく失われることが多い上に、事実が伝わることはまれなこと。
- b 真実が失せることが多く、うそばかりが伝わり易いこと。
- c 大半は散乱してしまい、どうしてもよいものだけが伝わること。
- d 虚実はあざなえる縄のごとく、表に出るものも出ないものもあること。

問三 傍線部3をもとに成立した書はどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 古事記
- b 日本書紀
- c 万葉集
- d 三代実録

問四 傍線部4「文字なしとて事たらざることなし」とは、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 文字があっても用途がない。
- b 文字なしではうまく伝えられない。
- c 文字がなくても、不便を感じない。
- d 文字があっても必要なものが手に入る。

問五 傍線部5は、『易経』繫辭上傳の「子(孔子)曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさず。然らば則ち聖人の意、其れ見るべからざるや、と。」を引いている。宣長は、どういう意味で引用しているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 言語に対する不信感を表す例。
- b 書承は口承に及ばないことを示す例。
- c 口伝えでなければ伝えられない例。
- d 手紙では意志の疎通が不十分である例。

問六 傍線部6は、どういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 口承のままならば、正確に伝わったはずなのに、文字記載されたことで伝わらなくなった可能性がある。
- b 口承のまま後代に残されるべき詳細な伝承は、文字化されることによってすっかり失われてしまった。
- c 口承は後世まで伝わりにくい、文字化しておきさえすれば永遠に失われることはない。
- d 文字による伝承は不正確ながらも残されるが、口承は精密であつても失われることが多い。

問七 傍線部7「難者」とあるが、「難」はここではどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 災難
- b 困難
- c 難点
- d 非難

問八 傍線部8「偏ならずや」とは、ここではどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 一方的である
- b いちずである
- c 固執している
- d 狭量である
- e 頑迷である

問九 傍線部9「古語」とは、ここでは何を指すか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 万葉集
- b 古今和歌集
- c 古事記
- d 風土記

問十 文章中しばしば用いられる「文字の徳」について、匡麻呂の考えに合致するものをA、宣長の考えに合致するものをB、両者にあてはまらないものをCとせよ。

- a 神武天皇以前のこととも記録することができる。
- b 大切な用事を遠くまで正確に伝えられる。
- c 一度記録しておけば長期間の保存が可能である。
- d 人の記憶の助けとなる。
- e 古代のこととも現代のことのようにはっきりわかる。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、設問の關係上、返り点・送り仮名を付していないところがある。

雩<sup>あまごひシテ</sup> 而<sup>フルハ</sup> 雨<sup>ゾ</sup> 何也。日<sup>ハク1</sup>、無<sup>ク</sup> 何也。猶<sup>ホ</sup> 不<sup>シテ</sup> 雩<sup>セ</sup> 而<sup>フルガ</sup> 雨<sup>一</sup> 也。<sup>2</sup> 日月食而救之、天  
 旱<sup>シテ</sup> 而<sup>シ</sup> 雩<sup>シ</sup>、卜<sup>シテ</sup> 筮<sup>シテ</sup> 然<sup>ル</sup> 後<sup>ニ</sup> 決<sup>スルハ</sup> 二 大<sup>ス</sup> 事<sup>ハ</sup>、<sup>3</sup> 非<sup>ズ</sup> 以<sup>テ</sup> 為<sup>ル</sup> 得<sup>ル</sup> 求<sup>ル</sup> 也、以<sup>テ</sup> 文<sup>スル</sup> 之<sup>ヲ</sup> 也。故<sup>ニ</sup> 君<sup>ハ</sup> 子<sup>ハ</sup> 以<sup>テ</sup>  
 為<sup>シ</sup> 文<sup>ト</sup> 而<sup>ハ</sup> 百<sup>ハ</sup> 姓<sup>ハ</sup> 以<sup>テ</sup> 為<sup>ス</sup> 神<sup>ト</sup>。以<sup>テ</sup> 為<sup>ル</sup> 文<sup>ト</sup> 則<sup>チ</sup> 吉<sup>シ</sup>、以<sup>テ</sup> 為<sup>ル</sup> 神<sup>ト</sup> 則<sup>チ</sup> 凶<sup>シ</sup> 也。在<sup>ル</sup> 天<sup>ニ</sup> 者<sup>ハ</sup> 莫<sup>ク</sup> 明<sup>ク</sup> 於<sup>テ</sup>  
 日<sup>月</sup>、在<sup>ル</sup> 地<sup>ニ</sup> 者<sup>ハ</sup> 莫<sup>ク</sup> 明<sup>ク</sup> 於<sup>テ</sup> 水<sup>火</sup>、在<sup>ル</sup> 物<sup>ニ</sup> 者<sup>ハ</sup> 莫<sup>ク</sup> 明<sup>ク</sup> 於<sup>テ</sup> 珠<sup>玉</sup>、在<sup>ル</sup> 人<sup>ニ</sup> 者<sup>ハ</sup> 莫<sup>ク</sup> 明<sup>ク</sup> 於<sup>テ</sup> 礼<sup>義</sup>。故<sup>ニ</sup>  
 日<sup>月</sup> 不<sup>レ</sup> 高<sup>カラ</sup>、則<sup>チ</sup> 光<sup>輝</sup> 不<sup>レ</sup> 赫<sup>カクナラ</sup>、水<sup>火</sup> 不<sup>レ</sup> 積<sup>チ</sup>、則<sup>チ</sup> 輝<sup>キ</sup> 潤<sup>ジユン</sup> 不<sup>レ</sup> 博<sup>ナラ</sup>、珠<sup>玉</sup> 不<sup>レ</sup> 睹<sup>ル</sup>。  
 乎<sup>ヤ</sup> 外<sup>ニ</sup>、則<sup>チ</sup> 王<sup>公</sup> 不<sup>レ</sup> 以<sup>テ</sup> 為<sup>ス</sup> 宝<sup>ト</sup>、礼<sup>義</sup> 不<sup>レ</sup> 加<sup>ハラ</sup> 於<sup>ニ</sup> 国<sup>家</sup>、則<sup>チ</sup> 功<sup>名</sup> 不<sup>レ</sup> 白<sup>ク</sup>。故<sup>ニ</sup> 人<sup>ノ</sup> 之<sup>ノ</sup>  
 命<sup>ハ</sup> 在<sup>ル</sup> 天<sup>ニ</sup>、国<sup>ノ</sup> 之<sup>ノ</sup> 命<sup>ハ</sup> 在<sup>ル</sup> 礼<sup>ニ</sup>。君<sup>タル</sup> 人<sup>ニ</sup> 者<sup>ハ</sup> 隆<sup>タムトヒ</sup> 礼<sup>ヲ</sup> 尊<sup>ベバ</sup> 賢<sup>ヲ</sup> 而<sup>チ</sup> 王<sup>タリ</sup>。重<sup>ンジ</sup> 法<sup>ヲ</sup> 愛<sup>スレバ</sup> 民<sup>ヲ</sup> 而<sup>チ</sup> 霸<sup>タリ</sup>。  
 好<sup>ミ</sup> 利<sup>ヲ</sup> 多<sup>ケレバ</sup> 詐<sup>レ</sup> 而<sup>チ</sup> 危<sup>フシ</sup>。權<sup>謀</sup> 傾<sup>ク</sup> 覆<sup>ル</sup> 幽<sup>険</sup> 而<sup>チ</sup> 尽<sup>ス</sup> 亡<sup>ス</sup> 矣。

(『荀子』天論篇)

〈注〉○卜筮―占いをする。 ○輝―輝に同じ。 ○睹―あらわす。 ○傾覆幽険―足をすくい陰険な策をめぐらす。

問一 文中の傍線部1「無何也」、3「非以為得求也」、4「百姓」、5「以為文則吉」の意味として、もつとも適切なものを次の中からそれぞれ一つ選べ。

- 1 a なにも起こらない  
b 大した理由はない  
c 困ったことがあるのか  
d べつに罪はないだろう
- 3 a 欲求を充足させるための手段としてではなく  
b 得たいものを得るために行うのではなく  
c 求めるものがそのまま手に入ると思うのではなく  
d 願うことがかなえられると考えるからではなく
- 4 a 商家  
b 民衆  
c 農家  
d 貴族
- 5 a 文字にすれば不吉ではなくなる  
b 礼楽としてはよいものである  
c 飾りだと思っていれば害はない  
d 文章にすれば良い兆しがあらわれる



問二 傍線部2「日月食而救之」とあるが、誰がどうすることをいうか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選べ。

- a 為政者が日食・月食を不吉なものと考えて、これを取り除こうとすること。
- b 君子が日食・月食を世にも稀な現象と見なして、これを政治にうまく利用すること。
- c 百姓が日食・月食を天の祟りとして恐れて、これから逃れようとする事。
- d 占い師が日食・月食を勝手に判断して、これを自分のよいように用いること。

問三 傍線部6「水火不積」とは、どのような状況をいうものか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 水を火に注がず燃えている状況
- b 水と火とを掛け合わせない状況
- c 水や火が少ししかない状況
- d 水と火とが相容れない状況

問四 傍線部7「白」と同義でない語を次の中から一つ選べ。

- a 著
- b 赫
- c 明
- d 文

問五 波線部X「於」、Y「乎」と同じ用法であるものとして、もっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選べ。

X a 君於趙為貴公子

b 霜葉紅於二月花

c 子擊磬於衛

d 趙數困於秦

Y a 名垂乎後世

b 天乎吾無罪

c 莫大乎天下

d 巍巍乎若泰山

問六 次の文章は、荀子を論評したものである。これを読んで以下の(1)・(2)の間に答えよ。

論<sup>シテ</sup>性<sup>ヲ</sup>正<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup> A 相<sup>ス</sup>反<sup>ス</sup>。曰<sup>ハク</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>性<sup>ハ</sup>惡<sup>ナリ</sup>、其<sup>ノ</sup>善<sup>ナル</sup>者<sup>ハ</sup>偽<sup>ト</sup>也。偽<sup>ナル</sup>者<sup>ハ</sup>矯<sup>ル</sup>飾<sup>之</sup>之<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>也。人<sup>ハ</sup>從<sup>ヘバ</sup>其<sup>ノ</sup>性<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>必<sup>ス</sup>歸<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>亂<sup>ニ</sup>。聖<sup>人</sup>起<sup>シ</sup> B 以<sup>テ</sup>矯<sup>ル</sup>飾<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>、使<sup>ム</sup> C 皆<sup>ク</sup>出<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>治<sup>ニ</sup>合<sup>セ</sup>於<sup>テ</sup>道<sup>ニ</sup>。

(1) 文中の空欄Aに入るものとして、もつとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a 墨子      b 孔子      c 孟子      d 韓非子      e 莊子

(2) 文中の空欄Bに入る語としてふさわしいものを、問題文(『荀子』天論篇)中より選ぶとすれば、もつとも適切なものはどれか。次の中から一つ選べ。

a 卜筮      b 国家      c 権謀      d 礼義      e 日月